

February 15, 2026

## 見えないものを見る

コリント第二 4:16-18

4:16 ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。

4:18 私たちは見えるものにではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

聖書には、いったいどういう意味なんだろうと思うような言葉がいくつもあります。イエスは「心の貧しい者は幸いです」、「悲しむ者は幸いです」と言われました。誰もが裕福で、楽しく、笑って過ごすことが幸いだと思っているのに、イエスは、それとは逆のことを言われたのです。また、「自分のいのちを得る者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを得るのです」（マタイ 10:39）とも言われました。こうした言葉を聞くとき、私たちは「えっ、どうして?」と思います。けれども、それによってその言葉に注意し、その意味を考えはじめ、大切な真理に至るのです。きょうの箇所「見えないものに目を留めます」というのも、理屈だけいえば、「見えないものはいくら目を凝らしても見えるわけがない」ということになりますが、「見えないもの」とは何なのだろう、どうやってそれを「見る」のだろうと考えるところから、この言葉の意味が分かるようになってと思います。

### 一、見えるものと見えないもの

世の中にあるものは、見えるものがすべてではありません。

見えるものもあれば、見えないものもあります。コリント第二 4:16は「内なる人」と「外なる人」のことを言っていました。

「外なる人」とは私たちの身体であったり、生活であったりするもので、これは見えます。しかし、「内なる人」は私たちのたましいや霊の部分、内面のいのちで、これは見えません。17節では「苦難」と「栄光」について書かれていました。「苦難」は、今、体験している様々な苦しみで、身体的なものもあれば精神的なものもありますが、それらは目に見え、感じ取れるものです。しかし、「栄光」は苦難の後に来るもので、まだ見えてはいません。けれども、「内なる人」や「栄光」は見えないからといって「ない」のではなく、たしかに存在します。

「外なる人」や「苦難」は誰にも見えるものです。けれどもそれらはいつまでも「ある」ものではありません。「外なる人」は衰え、やがて朽ちていき、「苦難」はどんなに大きく、強いものであっても、いつまでも私たちを苦しめるものではありません。それらは、「栄光」にとって代わられます。

身体の健康を考えるのは善いこと、必要なことです。けれどもたましいの健康に心を向けなければ、片手落ちになります。人間はからだだけの存在ではなく、霊とからだを持ったものですから、霊的な命が養われていなければ、人は人生で確かな歩みができなくなるからです。

聖書に、「見えるものが、目に見えるものからできたのではないことを悟ります」（ヘブル 11:3）とあります。これは言い換えれば、「目に見えるものの背後には目に見えないものがある」ということです。それは事実です。すべて目に見えるものの背後には、目に見えないものがあります。目に見えるものは目に見えないものから生じています。自然界にはさまざまな現

象があります。天体が規則正しく動くこと、風が吹き、雲が起り、雨や雪が降ること、冬の間、枯れ果てた野原に、春になると再び青草が萌だし、花々が咲き誇ることなどです。科学者たちは、そうした目に見える現象の背後にある目に見えないもの、引力、気圧、遺伝などの法則を探り出してきました。技術者たちは、それを応用して様々なものをつくり出しました。もし、科学者や技術者たちが目に見えるものしか見ていなかったら、現象の背後にある目に見えないものを見ていなかったら、今日の科学技術の発達はなかったのです。

## 二、ご自分をお見せになる神

ヘブル 11:1-3 はこう言っています。「さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。昔の人たちは、この信仰によって称賛されました。信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、その結果、見えるものが、目に見えるものからできたのではないことを悟ります。」目に見える自然の背後には、目に見えない自然の法則があり、その自然の法則の背後には神がおられると言っています。この自然は、見えない神が、それによってご自分を示そうとして創造されたものなのです。

よく、「神がいるなら見せてみろ」などという人がいますが、その人は、神が自然界を通して、また、大宇宙を通してご自分を見せておられるのに、それを認めないだけなのです。

レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロが実在したこと、その時代に優れた知性と感性を持っていたことは誰もが認めます。それを疑う人などいません。今も、彼らを称賛しています。人々は、ダ・ヴィンチにも、ミケランジェロ

にも、ラファエロにも会ったこともなければ、見たこともないので、なぜでしょう。人々は彼らが遺した絵画や彫刻などの作品を見て、その人たちを知り、彼らをほめたたえているのです。人間の作品でさえ、その作者を表わしているなら、神の作品であるこの世界は、それを造られた神を、私たちに示さないのでしょうか。詩篇 19:1 に「天は神の栄光を語り告げ／大空は御手のわざを告げ知らせる」とあり、ローマ 1:20 に「神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません」とあります。神によって造られたものすべては、神の栄光と、力を現しているのです。

しかし、被造物が神の力を現しているとはいえ、それだけでは、神のみこころのすべてが伝わりません。それで神は、言葉で人々に語りかけてくださいました。モーセによって律法が与えられるまでは、神は個人個人に様々な方法で直接的に語りかけられましたが、そののちは律法という言葉を通して、人々に語られました。詩篇 19:7 では「主のおしえは完全で／たましいを生き返らせ／主の証しは確かで／浅はかな者を賢くする」とあって、自然に続いて、律法が神と神のみこころを教えるのです。

自然と言葉とに続いて、神は、もう一つの方法で、私たちにご自身の愛を伝えようとなさいました。それは、ご自分の独り子を人として、人の世界に送られるという方法でした。私たちは、豊かな自然によって心が洗われたり、動物をかわいがって心が癒やされるといった体験をします。けれども、やはり人が一番分かるのは人であり、人を一番分かってくれるのも人です。ですから、神の御子は人となられて世に来られ、人と接し、人を癒やし、人を赦し、人を愛して、十字架で死なれたの

です。神はご自分の愛を示そうとして、御子を人として世に送られたのです。

聖書は言います。「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」（ヨハネ 1:18）見えない神は、いつまでも、見えないままでおられたのではなく、見える神となってくださったのです。イエスは「わたしを見た人は、父を見たのです」（ヨハネ 14:9）と言われました。私たちはイエスによって神を見ているのです。しかも、愛の神を見ているのです。

弟子たちは、生ける神であるイエスをその目を見て、それを証しました。それは「福音」と呼ばれ、「律法」に加えられ、律法が与えることのできなかつた罪の赦しを告げるものとなりました。

### 三、信仰によって見る

神は、人間をはじめ、あらゆる造られたものを超えて偉大なお方で、神は人には「見えないお方」です。しかし、神は自然の中にご自分を示し、聖書の中で語り、さらに、イエスによってご自分を見せてくださいました。神は、見ることができるお方になりました。ですから、使徒パウロは、きょうの箇所です、「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます」と言うことができたのです。「本来見ることができないお方が見えるお方になられた。だから、私たちは見るのです」と言っているのです。

私たちに神が見えないとしたら、私たちの側に足りないものがあるからです。それは「信仰」です。自然を見て、そこに神の知恵や力を認めるために必要なのは、天体や物理、生物や化

学の知識ではありません。神への素直な信仰です。聖書の言葉を知るのも同じです。知識は役に立ちます。それは信仰を強くし、養います。しかし、聞き従う心で聖書を読めば、誰もが真理を見いだすことができます。私たちがイエスのうちに神を見ることができるのも、イエスへの信頼によってです。それで、ヘブル人への手紙は、11:3で「信仰によって、私たちは、この世界が神のことで造られたことを悟る…」と言い、12:2で「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい」と教えているのです。「目を離さないで…」といわれている「目」はイエスへの信仰の目です。

最後にネイティブ・アメリカンの間に伝えてられている話をしましょう。ある部族のかしらが病気で倒れました。彼は自分のあとつぎを決めるため、部族の中から三人の若者を呼びだしました。そして、こう言いました。「おまえたちの体力と、忍耐力を試したい。今から、村のかなたにそびえているあの峰に登ってきてもらいたい。登ったしるしに何か証拠になるものをひとつだけ持って帰ってくるのじゃ。」

やがて夕方になって、一番最初に帰ってきた若者の手には、その峰の山頂に咲いていたきれいな花がありました。その若者は一枚の葉も、花も傷つけずに、それを持ち帰ったのです。かしらはこの若者のやさしさにとても感動しました。次に帰ってきた若者の手には山頂の岩に生えていた苔がありました。その若者は危険をおかして、頂上の岩の上にまで登ってそれを取ってきたのです。かしらは、この若者の勇気を誉めました。

そのうち、最後の若者が帰ってきましたが、その手には何も持っていませんでした。しかし、彼はこう言ったのです。「頂上の岩から向こうに広々とした草原があるのを見つけました。」

そこは、私たちの部族が住むのにもってこいの土地です。みんなで、あそこに進んでいきましょう。」それを聞いて、部族のかしらは、立派なあとつぎが出来たことに安堵しました。

最初の青年にも、二番目の青年にも、山の向こうの土地は、見ようと思えば見えたのですが、二人はそれに目を向けませんでした。しかし、三番目の青年の心には部族の将来を思う心がありました。その心が、山の向こうの広く、豊かな土地を見させたのです。私たちの心にも、信仰が宿るなら、その信仰によって、私たちをとりまく世界に神の知恵と力を認めることができます。聖書の中で神の言葉を聞くことができます。イエスのうちに、愛と救いの神を見ることができるとのことです。「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。」ここで言われている「見えないもの」とは、信仰がないために「見えなくなっているもの」なのかもしれません。信仰の目でそれらを見ることができるよう、日々祈り求める私たちでありたく思います。

### (祈り)

父なる神さま、私たちは、移りゆく世に生きているために、「永遠に続くもの」を見失いがちです。あなたが、信じる者に与えてくださった永遠の命に、一時の軽い苦難ののちに受ける重い永遠の栄光に目を留め、日々を歩めるよう、私たちに信仰を与えてください。私たちに信仰を与え、その信仰を導いてくださる主イエス・キリストに目を留め、そのお名前です。